2009年度 終了

エソテリズムを超えて
―グルジェフの教えと現代心理学の統合的展開に向けて―

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
鈴 木　秀 一

人間の存在とはなにか。そして，人間形成において理想とされる成長や進化とはいかなるものか。

この永遠のテーマについて，古来より宗教や哲学の世界において多くの議論が為され，数多くの思想家が自らの人生を賭してその解明に挑んできた。しかし，この謎を解明するためには超えなくてはならない大きな壁がある。人間の存在を観察し得る客観的位置に立つためには，それを見つめる“純粋に公正的な視点”がなくてはならないわけだが，観察を行う側の「私」という存在がきわめて不明瞭であり曖昧であるために，現実的な事実に対して個人認識に偏った歪んだ観察が為され，真に的確な判断を行うための冷静な思考がまったく機能していないということである。

つまり，人間を語るには，その前提となる「私」を入念に理解する必要がある。自らが思考的囚われの中に在るということを自覚し，それを踏まえた上で冷静に観ることができなければ，自らの目に映る現象すべてが染色され変更された虚構の産物でしかなく，いかに意識上で冷静であろうと努めても所詮は主観的な位置から脱することはできないのである。

とすれば，まず最初に自らを対象化し，「私」というものがどのような傾向や特徴を持っているかについて知ることから始めなくてはならない。それを脇に置いたままでは客観的な位置などあり得ないからである。このような基本的視点を再検証する試みは，社会学や経済学，または政治や倫理など，人間が営むあらゆる分野において同様に大きな前提であるべきはずのものだが，意外にも多くの場面において確認が為されず見過ごされてきた経緯がある。

本論文では，人間の思考や言動がいかに無自覚的であるかについて，G.Ⅰ.グルジェフの教えに関する書籍群を参考に検証を深め，同時に幾つかの実際的な事例を挙げながら解説を試みる。また，人間の行為において，意識化が為されていないがために生じている諸々の問題についても触れることにしたい。さらに，それがなぜ反復され続けるのか，数千年の歴史を経てもなお何故に回帰的に同じ位置に留まり続けるのかについて，人間が成育過程において身につけてしまう無自覚的傾向の要因を再検討することにより，無自覚さからの脱却と自己覚知を促すための新たな方法を模索するものである。

具体的な方法としては，グルジェフ没後60年という歳月において，臨床的に培われてきた“人間についての心理学的理解”を基に開発された“カウンセリング”や“ワーク”などの促進的手法や，東洋の宗教に伝承されてきた古の教えを導入することにより，エソテリックな姿勢を踏まえつつ，最新の心理学であるトランスパーソナル心理学における統合的展開に可能性を見出したい。